

太宰治「癩取り」の心理学的研究

—「ジョハリの窓」による分析と登場人物イメージの把握—

大野木 裕 明

仁愛大学人間生活学部

A Psychological Study on *Kobutori* by DAZAI Osamu: The Images of the Characters analyzed by Johari Window Theory and Semantic Differential Technique

Hiroaki OHNOGI

Faculty of Human Life, Jin-ai University

key words : Johari window, character, causal attribution, DAZAI Osamu

太宰治の小説「癩取り」（『お伽草紙』所収）に現れる登場人物2名のキャラクターを心理学的方法によって把握するために、研究1では分析ツールとして「ジョハリの窓」理論を用いて作品中のキャラクター記述の箇所を分類整理した。研究2ではSD法（5件法12尺度）を大学生男女合計181名に対して実施し、彼らが読後にイメージとして抱いた登場人物2名のプロフィールを検討した。

キーワード：ジョハリの窓、キャラクター、原因帰属、太宰治

1. 問題と目的

太宰治の文学作品「癩取り」（『お伽草紙』所収）は、昔話「こぶとりじいさん」を素材として、太宰治が独自の視点から描いた小説である。本研究の目的は、登場人物のキャラクターに関する太宰治の文学的な表現が、読者にどのように伝わっているのかを心理学的に検討することである。そのために本稿では2つの研究を行う。研究1では作品の内容を論理分析するための枠組みとして、「ジョハリの窓」理論（以下、括弧を略する）を分析ツールとして援用して、ジョハリの窓による「癩取り」のテキスト分析を試みる。研究2では読者が太宰治の「癩取り」の読後に得た登場人物のイメージをSD法（意味微分法 semantic differential technique）によって測定する。

なお、研究1の報告に入る前に、以下に若干の補足説明を加える。それらは、一般的に知られている「こぶとりじいさん」のあらすじ、太宰治の短編小説「癩取り」のあらすじ、ジョハリの窓理論、SD法である。

ここで特に補足説明をする理由は、文学的な内容について心理学的に接近するという独特の方法論のためである。

2. 一般的に流布している昔話 「癩取爺／こぶとりじいさん」

わたしたちの多くが知っている昔話「癩取爺／こぶとりじいさん」は古くからの文献に現れている。鎌倉時代13世紀初期に成った『宇治拾遺物語』の中の「鬼に癩とらるること」（例えば、小林智昭校注『日本古典文学大系28—宇治拾遺物語—』、Pp. 56-60）がそれである。江戸時代初期（1623年／元和元年）には成立していたとされる『醒睡笑』にも巻1に話の前半部が、巻6に話の後半部が分かれて記されている。これらの文献は流布・伝承の一側面にすぎず、むしろ口承文芸的に日本全国に広く伝播されていることもわかっている。ヨーロッパ諸国、インド、チベットなどにも似た話があり、例えば『グリム童話集』にみられる「こびとのおつかいもの（KHM182）」はよく知られた一例

である。

この領域の代表的な事典として知られた『日本昔話事典』によると、あらすじは以下のようである。「瘤取り爺：頬に瘤がある爺が山中に行き、うつぼ木に雨やどりしていると鬼の宴会に出くわし、踊りを踊ってほめられる。鬼は爺がまた踊りに来るための質ぐさとして爺の頬から瘤をもぎ取る。隣の爺がそれを聞き、自分も瘤をとってもらおうと出かけてゆくが、踊りが下手でかえって前の爺がおいていった瘤までつけられてしまうという話」。

昔話研究の領域では、先の人の成功を隣の人が真似するが失敗に終わることから、そのタイプを総称して「隣の爺型」の昔話ということがある（稲田、1978）。またこれを心理学的にみると、人真似による模倣学習であるからモデル（お手本）を観察して学習が成立するという心理学的モデリング（Bandura, 1969；1986；1997）の事例とみることができる（Ohnogi, 1982ab；大野木、1984ab；大野木・伊藤・中澤、1987；大野木、2009）。

3. 太宰治「瘤取り」

太宰治の文学作品「瘤取り」は、『日本昔話事典』（弘文堂）で解説されているあらすじと比べると、いくつかの大きな相違点がある。太宰治の「瘤取り」のあらすじを筆者（大野木）なりに要約するところである。

私（太宰治）の手元には「こぶとりじいさん」の絵本がある。その絵本の物語とまったく別の新しい物語をこれから、胸中に描き出してみたい。——酒飲みで、顔に瘤のあるお爺さんがいた。このお爺さんの妻は無口でまじめに家事に勤しんでいる。息子は阿波聖人といわれるような品行方正の人であり、その家はまあ世間でいう所の立派な家庭である。しかし、お爺さんは孤独な人であった。家族からの疎外感に苛まされて暮らしており、顔に付いている瘤が自らの孤独を慰めてくれる唯一の相手の方であった。このお爺さんは山中で鬼どもに出くわすが、一緒に酒を飲み踊ってお互いに打ち解け、結果として鬼がお爺さんの顔の瘤を取った。他方、近所にもう一人、顔に瘤のあるお爺さんがいた。このお爺さんは人品骨柄はいやしくない

人で近所からは旦那、先生と呼ばれる人であった。このお爺さんは瘤を悩みの種にしていたので、自分も瘤を取ってもらおうと、同様に山中に出かけ、鬼たちの前で舞を舞った。ところが鬼たちはお爺さんの踊る楽しめない舞いに閉口してしまい、結果としてお爺さんは瘤取りに失敗してしまった。私（太宰）は、この出来事を気の毒な話だと思う。2人のお爺さんも鬼たちも、そして家族も、特段に悪いことをした訳ではなかったのに不幸な結末になってしまったからである。これは因果応報の出来事ではなくて、私（太宰）が思うに、ただただ「性格の悲喜劇」である。——

太宰治の小説「瘤取り」が書かれた時代背景について、文庫本『お伽草紙』（新潮社版、1972年）の解説を行った奥野健男は次のように述べる。——『お伽草紙』は、敗戦直後の昭和20年10月筑摩書房から書き下ろし小説として刊行された。戦争末期の昭和20年3月、「前書き」にもあるように連日の空襲のさなか執筆にかかり、敗戦の直前の7月に完成した。（p. 328）
・・・中略・・・太宰治は明日知れぬ生命の空襲のさなか、防空壕の中で子供に読んできかせる「ムカシムカシノオ話ヨ」という絵本をもとに、日本人に膾炙されたお伽話の中に、自己の人生観、芸術観、倫理、思想、実生活体験のすべてを投げ込み、渾然たる芸術をつくりあげたのだ。（p. 329）—— また、奥野健男は、作品の登場人物の描き方に関して、次のようなコメントを記している。——太宰治は自分で小説のストーリーをつくるより、既にあるストーリーの中で、その作中人物の心理や情景をさまざまに解釈し、その中に自己を仮託して空想をたくましくするのが好きだったらしい。（p. 324）——

このように、太宰治の「瘤取り」は、確かに昔話「瘤取り爺／こぶとりじいさん」の話ではあるものの、それを素材にしつつも独自の解釈から登場人物の心理や情景を創作した作品である。したがって、ここに描かれている登場人物は、太宰なりの解釈に基づいた人物である。正直な善いお爺さんが瘤取りに成功し、意地悪な悪いお爺さんが瘤取りに失敗するという、いわゆる善因善果・悪因悪果の因果応報話とは一線を画している。

4. ジョハリの窓

ジョハリの窓 (Johari Window) は「対人関係における気づきのグラフ式モデル」として Joe (Joseph) Luft と Harry Ingham によって考案された。1955年夏のアメリカ西海岸地方で開催したラボラトリー (集中的人間関係訓練) で紹介したのが始まりで、最初の文献は UCLA の Extension Office が刊行した *Proceedings of the Western Training Laboratory in Group Development*、1955に現れている (以上の説明は柳原、1980、p. 8による)。

ジョハリの窓理論では、他者と関わる総体 (total person) としての私には4つの象限を持つ窓があると捉える。それらは、私も他者も公的に自己をわかっている開放 open 領域 (第Ⅰ象限)、私にはわかっていないが他者は自分をわかっている盲点 blind 領域 (第Ⅱ象限)、自分はわかっているが他者はわかっていない閉鎖 hidden 領域 (第Ⅲ象限)、私も他者もわかっていない未知 unknown 領域 (第Ⅳ象限) である。もちろん、この窓は心理学的モデルであり、実際に身体に窓があるわけではない。

文学作品の登場人物の対人関係を分析するツールとしてジョハリの窓を用いる研究は、大野木 (2005) によっておそらく初めて試みられた。この分析は夏目漱石『坊ちゃん』の主人公「おれ」について試みたものであり、具体的には登場人物「おれ」に関する周囲の人からの人物評の記述文章を抜き出し、それをジョハリの窓の4つのうちの該当領域に貼り付けることにより、「おれ」の人間関係を分析している。

5. SD 法

心理学における SD 法は、言語、色彩、音楽、商品、人物などの意味やイメージを測定する方法として Os-good (1957) らが開発した技法である。SD 法は、調べたい対象 (SD 法では「概念」という) に対する印象を、「きれいーきたない」といった等間隔の目盛からなる5段階や7段階の尺度上に回答者に評定を求める方法である。「概念」の測定に使われる心理学的な技法の1つである (岩下、1983；大山・岩脇・宮埜、

2005；海保・大野木・岡市、2008)。昔話の登場人物をテーマとして扱った研究としては、すでに堀 (1979)、Ohnogi (1982)、大野木 (1983；1984a) などがある。SD 法を用いることにより、例えば登場人物 A と登場人物 B が読者や視聴者からどのようなイメージを持たれているのかを数量的に測定することができる。本研究では大野木 (1984a) で用いた「生き生きした一生気のない」などの5件法12尺度を使用する。

研究1：ジョハリの窓を用いた分析

1. キャラクターに関する記述の抽出

まず最初に、「お爺さん」「隣のお爺さん」というキャラクターに関して記述の見られた箇所を探したところ以下ようになった。

お爺さん：酒飲み。酒を飲むから家の者たちにきらわれて。つねに浮かぬ顔。(瘤が) 自分の孤独を慰めてくれる唯一の相手。(近所のひとが瘤を) 同情。この瘤を本当に自分の可愛い孫のように思い。酒飲みは罪のないもの。少しも悪い事をしていない。(宝物のように見える瘤を鬼が) あずかって置いたらきつとまたやってくる。浮かぬ気持ち。(瘤は) 無くてかなわぬ恰好の話し相手。お酒を飲んでいない時には意気地が無くてからきし駄目。酔っている時にはかえって衆にすぐれて度胸のいい。腰を抜かすなどという醜態を示すことは無かった。よそのものたちが酔っているのを見ても一種のよろこばしさを覚える。所謂利己主義者ではない。(機嫌良く酔っている鬼どもに対して) 親和の情。(瘤は) 唯一の話し相手。(瘤を取られて) 少し寂しい。(瘤を取られて) 悪い気持ちのものではない。損も得も無く一長一短。久しぶりで思うぞんぶん歌ったり踊ったりしただけが得。

隣のお爺さん：人品骨柄はいやしく無い。思慮分別も十分如くに見える。学問もある。財産もどっさり。旦那あるいは先生などという尊称を奉り。何もかも結構。立派なお方。(ジャマツケな瘤のために) 鬱々として楽しまない。(瘤をからかわれて) うるさいと怒り。ぎょろりと妻子を睨んで。(瘤2つ) 恥ずかしそうに。別に悪事を働いたというわけではない。ひどい意気込み。傑作意識に凝り固まった人。(瘤を) ジャ

マッケなものとして憎み出世のさまたげ。(瘤のため)あなどられ嘲笑させられて。鏡を覗いて溜息を吐き。がっかりして「これは、駄目だ」。(瘤を)小刀で切つて落とそうか死んだっていい。鍾馗かもしれねえ。この変な人。

このように、キャラクターにまつわる人物評の記述を吟味したところ、(1)他の登場人物から向けられた人物表現、(2)自分で自分自身を評した表現、(3)著者の太宰自身が作品中に介入して語った人物表現などが混在していることが明らかになった。これには検討すべき問題がある。実際に、記述箇所をジョハリの窓の4領域の中へと貼り付けていく時に、キャラクターに関する記述が自分からの視点によるものか他者からの視点によるものかが不明だと作業が進まないからである。この点で会話による人物評がなされている箇所の分類整理は明確である。しかしながら、著者が登場人物Aの周囲の人間関係について言及する時などには、それが登場人物A自身も知っていることなのか周囲の他者B、Cも知っていることなのか必ずしも明らかでないことがある。

このようなことを考えると、少なくとも次の3つの表現を区別することが望ましいだろう。1つは誰かが誰かに対して発した会話である。これを会話的表現と呼ぶことにする。2つは会話表現以外の表現であり、著者が対人関係の説明やキャラクターを記述した表現法である。これを情景描写的表現と呼ぶことにする。3つは特別な場合であるが、著者自身が作品の中に介入して記述した表現である。これを著者介入的表現と

呼ぶことにする。以上、少なくとも、会話的表現、情景描写的表現、著者介入的表現を区別することによって、キャラクター描写の情報源が誰から発した情報であるかが作業的に明らかになり、また明らかにできない記述がどれであるかを確認することができるだろう。このように対人関係上の情報源を確認しながらキャラクターを特徴づけていくことが、作品中の人物像をよりの確にとらえることにつながるものと考えられよう。

2. ジョハリの窓を用いた内容分析

大野木(2005)にならって、2名の登場人物「お爺さん」「隣のお爺さん」に関する人物評の文章をジョハリの窓の該当領域に割りつけた。作業にあたり、会話的表現に関してはA、B、Cのようにアルファベットで、情景描写的表現に関しては①②③のように通し番号で記した。はっきりと著者(太宰)自身が作品の中に介入して記述を行っている著者介入的表現に関しては、情景的表現と同様に通し番号にした。

お爺さんについては表1、隣のお爺さんについては表2に結果をまとめる。なお、ジョハリの窓では2×2の4セルの中に、第I象限(開放open領域)、第II象限(盲点blind領域)、第III象限(閉鎖hidden領域)、第IV象限(未知unknown領域)の各成分が表現されることが多いが、本稿では該当箇所の少ない領域があったことから紙幅の節約のために羅列形式にて記載した。

表1 ジョハリの窓による太宰治「瘤取り」の内容分析①～お爺さん～

■自分も他者も共に知っている自己「第I象限 開放(open)領域」

他者=家族(息子、妻[お婆さん、以下同じ]) 自分=お爺さん

①酒飲み(p.211)

②孤独だから酒を飲むのか、酒を飲むから家の者たちにきられて自然に孤独の形になるのか、(p.211)

③家庭に在っては、つねに浮かぬ顔をしているのである。(p.211)

Aお爺さん「(自分の瘤に対して)こりゃ、いい孫ができた。」(p.213)に対して

息子→「瘤から子供が生まれる事はございません。」と興覚めたことを言い、(p.213)

妻→「いのちにかかわるものではないでしょうね。」と、にこりともせず一言、尋ねただけで、それ以上、その瘤に対して何の関心も示してくれない。(p.213)

④自分の孤独を慰めてくれる唯一の相手として、朝起きて顔を洗う時にも、特別にいいぬいこの瘤に清水をかけて

洗い清めているのである。(p. 214)

⑤結局、このお爺さんの一家に於いて、瘤の事などは何の問題にもならなかったわけである。(p. 223)

他者＝近所の人 自分＝お爺さん

B 近所の人→「同情して、どういうわけでそんな瘤が出来たのでしょうか、痛みませんか、さぞやジャマツケでしょうね、などとお見舞いの言葉を述べる。」(pp. 213-214) に対して

お爺さん→笑ってかぶりを振る。ジャマツケどころか、お爺さんは、いまは、この瘤を本当に、自分の可愛い孫のように思い、(p. 214)

他者＝猿・兎・山鳩・雨宿りの鳥獣 自分＝お爺さん

C「この座敷には偉いお婆さんも聖人もいませんから、どうか、遠慮なく、どうぞ。」などと、ひどくはしゃいで、(中略) 酒飲みは酔ってつまらぬ事もいうが、このように罪のないものである。(p. 215)

他者＝鬼ども 自分＝お爺さん

D (鬼どもがお爺さんの瘤をむしり取ったので、お爺さんは)「や、それは困ります。私の孫ですよ。」(p. 221)

他者＝著者 自分＝お爺さん

⑥あのお酒飲みのお爺さんも、(中略) 少しも悪い事はしていない。(p. 226)

■私にはわかっていないが他者は自分をわかっている「第Ⅱ象限 盲点 (blind) 領域」

他者＝鬼ども 自分＝お爺さん

E 鬼ども→あの頬ぺたの瘤はてかてか光って、なみなみならぬ宝物のように見えるではないか、あれをあずかって置いたら、きっとまたやって来るに違いない、(p. 221))

■自分はわかっているが他者はわかっていない「第Ⅲ象限 閉鎖 (hidden) 領域」

他者＝家族 (息子、妻)、近所の人 自分＝お爺さん

⑦お爺さん：浮かぬ気持ち (p. 212)

⑧お爺さん：(瘤に対して) 孤独を慰めてくれる唯一の存在 (p. 214)

F お爺さん：この瘤は殊にも、お爺さんに無くてかなわぬ格好の話し相手である。(中略)「～阿波聖人とは恐れいる。お見それ申しましたよ。偉いんだってねえ。」など、誰やらの悪口を瘤に囁き、(p. 214)

他者＝鬼ども 自分＝お爺さん

⑨お酒飲みというものはお酒を飲んでいない時には意気地が無くてからきし駄目でも、酔っている時には、かえって衆にすぐれて度胸のいいところなど、見せてくれるものである。(p. 218)

⑩ (ほろ酔いで [中略]、眼前の異様の風景に接して、) 腰を抜かすなどという醜態を示すことは無かった。(p. 218)

⑪お酒飲みというものは、よそのものたちが酔っているのを見ても、一種のよろこばしさを覚えるものらしい。所謂利己主義者ではないのであろう。(p. 218)

⑫鬼どもは、いま機嫌よく酔っている。お爺さんも酔っている。これはどうしても、親和の感の起こらざるを得ないところだ。(p. 218)

⑬ (瘤を取られたのに対して) 瘤は孤独のお爺さんにとって、唯一の話相手だったのだから、その瘤を取られて、お爺さんは少し淋しい。しかしまた、軽くなった頬が朝風に撫でられるのも、悪い気持のものではない。結局、まあ、損も得も無く、一長一短というようなところか、久しぶりで思うぞんぶん歌ったり踊ったりしただけが得 (pp. 221-222)

他者＝家族 (妻) 自分＝お爺さん

⑭昨夜の不思議な出来事を知らせてやりたくて仕様が無い。しかし、お婆さんの厳然たる態度に圧倒されて、言葉が喉のあたりにひっからまって何も言えない。(p. 218)

■私も他者もわかっていない「第Ⅳ象限 未知 (unknown) 領域」

他者＝鬼ども 自分＝お爺さん

⑮ (ほろ酔いで) なに恐れんやというようなかなりの勇者になっているのである。(p. 218)

() 内は該当箇所のページ。

表1の登場人物「お爺さん」について象限ごとに見ていく。

開放領域に関しては、キャラクターに関わると判断できる箇所は10か所であった。そのうちで、情景描写的表現は①から⑤までの5か所で、家族（息子あるいは妻）からみたお爺さんのキャラクターに関する記述であった。⑥は、「あのお酒飲みのお爺さんも、（中略）少しも悪い事はしていない」として著者（太宰）自身が小説中に私見的な言及をしている著者介入的表現であり、これは①から⑤までのような情景描写的表現とは書き方が異なっている。誰かが誰かに直接的に会話によって人物評を行った会話的表現の箇所はAからDまでの4か所であった。会話Aについては、お爺さんの独り言に対して息子とお婆さん（妻）からの言及がなされている。家族以外には、近所の人（B）、猿・兎・山鳩・雨宿りの鳥獣（C）、鬼ども（D）とのやりとりが記載されている。

盲点領域ではキャラクターに関わると考えられる箇所は会話的表現のE「あれ（注：宝物）を預かって置いたら、きっとまたやって来るに違いない。」であった。お爺さんが瘤のことにどう思っているかを鬼が推測するという記述であり、直接的にはお爺さんのキャラクターを評したものではないが、間接的には

人物描写になっていると考えられよう。

閉鎖領域では通し番号⑦から⑭までの8か所が情景描写的表現を基本とする記述であり、その内容はお爺さんが孤独な気持ちであり、酒飲みでない人には酒飲みの気持ちをわかってもらえないと考えていること、酒飲みは酒飲み親和の感を持つことなどであった。会話的表現は1か所（F）であった。

未知領域と考えられる箇所は1か所（⑮）であり、情景描写的表現であった。これは鬼どももお爺さん自身も、お爺さんは酒に酔っている鬼どもを恐れないう気持ちについての記述であった。

以上より、ジョハリの窓の4領域に該当する視点からの人物評の記述がすべてなされていることが明らかになった。ただし、先に大野木（2005）が『坊ちゃん』の主人公「おれ」のキャラクターについて試みたように、会話的表現はAからFまでの6か所にとどまり、他方で背景描写の表現形式によるキャラクター説明が少なくとも15か所みられたということが特徴であった。著者の太宰自身が小説の中に入り込んで「あのお酒飲みのお爺さんも、（中略）少しも悪い事はしていない」（⑥）と言及している著者介入的表現も大きな特徴であると考えられよう。

次に、隣のお爺さんに関する表2の結果に移る。

表2 ジョハリの窓による太宰治「瘤取り」の内容分析②～隣のお爺さん～

■自分も他者も共に知っている自己「第Ⅰ象限 開放（open）領域」

他者＝近所の人たち 自分＝隣のお爺さん

①このお爺さんの人品骨柄は、いやしく無い。（中略）思慮分別も十分如くに見える。（p. 223）

A 学問もあるそうで、財産も、あのお酒のみのお爺さんなどは較べものにならぬくらいどっさりあるとかいう話で、（中略）一目置いて、「旦那」あるいは「先生」などという尊称を奉り、何もかも結構、立派なお方（p. 223）

他者＝家族（妻、娘）、近所の人たち 自分＝隣のお爺さん

②左の頬のジャマツケな瘤のために、旦那は日夜、鬱々として楽しまない。（p. 223）

他者＝家族（妻、娘） 自分＝隣のお爺さん

B（瘤をからかわれて）うるさい！と旦那は怒り、ぎょろりと妻子を睨んですつくと立ち上がり、（p. 224）

③コブ フタツ ハズカシソウニ オジイサン（瘤二つ 恥ずかしそうにお爺さん）（p. 226）

他者＝著者（太宰） 自分＝隣のお爺さん

④このお爺さんは別に悪事を働いたというわけではない。（p. 226）

■私にはわかっていないが他者は自分をわかっている「第Ⅱ象限 盲点（blind）領域」

他者＝鬼ども 自分＝隣のお爺さん

⑤鬼に踊りを見せに行くのだから、鬼退治に行くのだから、何が何やらひどい意気込みで（中略）、所謂「傑作意識」に

こりかたまった人 (p. 225)

⑥オニドモ ハイコウ (鬼ども閉口) (p. 225)

■自分はわかっているが他者はわかっていない「第Ⅲ象限 閉鎖 (hidden) 領域」

他者＝家族 (妻、娘)、近所の人たち 自分＝隣のお爺さん

C 瘤を、本当に、ジャマツケなものとして憎み、とかくこの瘤が私の出世のさまたげ、この瘤のため、私はどんなに人からあなどられ嘲笑させられて来た事か、と日に幾度か鏡を覗いて溜息を吐き、(p. 223)

他者＝家族 (妻、娘) 自分＝隣のお爺さん

D (瘤をからかわれて) 奥の薄暗い部屋に退却して、そっと鏡を覗き、がっかりして、「これは、駄目だ」と呟く。(p. 224)

E いっそもう、小刀で切って落とそうか、死んだっていい、とまで思いつめた時に、(p. 224)

他者＝鬼ども 自分＝隣のお爺さん

F 「逃げろ、逃げろ、鍾馗かも知れねえ。」(p. 225)

G 「この変な人」(p. 226)

■私も他者もわかっていない「第Ⅳ象限 未知 (unknown) 領域」

該当箇所見当たらず。

() 内は該当箇所のページ。

開放領域は会話的表現が A と B の 2 箇所であり A は近所の人たちからの呼称や人物評に関する内容であった。B は家族との会話のやりとりであった。情景描写的表現は①から④の 4 か所であり、①②は近所の人たちあるいは家族、③は鬼ども、④は著者 (太宰) 自身の著者介入的表現であった。盲点領域に関しては、⑤⑥の 2 つの情景描写的表現がみられた。ただ、⑥の「オニドモ ハイコウ (鬼ども閉口)」は会話的表現ではないものの隣のお爺さんに対する閉口であるから、会話でなくとも会話的表現に含めてもよいものとみなした。

閉鎖領域に関しては、自分自身に対する会話的表現 (C、D、E)、鬼どもの仲間内の会話 (F、G) の 5 か所が該当した。

未知領域については該当箇所は見あたらなかった。

以上をまとめると、開放領域、盲点領域、閉鎖領域については該当する記載があるが未知領域では見あたらず、内訳は情景描写的表現が 5 か所、著者介入的表現が 1 か所、会話的表現が 7 か所であった。

研究 2：登場人物のイメージの測定

1. 目的

お爺さん、隣のお爺さんという 2 名の登場人物を SD 法により測定し、読者にどのように受け止められているかを明らかにする。「瘤取り爺さん」のイメージ測定に関して SD 法を用いた先行研究には堀 (1979)、大野木 (1983、1984a) がある。

堀 (1979) は、大学生 36 名に対して、同じ昔話であるが詳細型とあらすじ型の 2 つのタイプの物語について、その登場人物のイメージを SD 法 (7 件法、17 尺度) を用いて測定し結果を比較検討した。詳細型とはオノマトペ (声喩) の多用、語りかける口調、反復など形象度の高い話であり、あらすじ型とはあらすじ中心の教科書風の形象度の低い話である。詳細型の出典は小松崎進『とんとむかし その 1』(嶋の森書房)、あらすじ型の出典は、岩崎敏夫『柳田国男の分類による日本の昔話』(角川書店) であった。結果であるが、「こぶとり」の登場人物について回答した SD 法によるプロフィールをみると、詳細型で得られた主人公の人物評とあらすじ型のそれとは類似していたが、あら

すじ型の回答の方が詳細型よりも登場人物の把握が単純であった。大野木(1983)は、「こぶとりじいさん」の話として江戸時代の『醒醉笑』から採った柳田国男「こぶ二つ」(角川書店)を素材として、堀(1979)のSD法17尺度(ただし5件法に変更)を用いて中学生、高校生、大学生の合計372名に評定を求めた。年齢差を見ると、登場人物「坊さん」(お爺さんに相当する)への感情・評価得点(「すきなーきらいな」「よいーわるい」尺度など)は中学生、高校生、大学生という加齢とともにポジティブからニュートラルな方向へと移動し、他方で登場人物「近所の坊さん」(隣のお爺さんに相当する)への感情・評価得点はネガティブからポジティブな方向へと移動していた。以上から、お話の型や登場人物の描き方によって読者のイメージは異なり、また同じ話でも読者の年齢によって受け取るイメージが異なることが明らかになった。

大野木(1984a)は、太宰治の「瘤取り」を素材として、親子を調査協力者として登場人物に関するSD法(5件法、12尺度)を実施した。子ども群は64名の大学生とその兄弟姉妹の合計108名、親群はその両親の合計95名であった。親子間の比較によると、登場人物「お爺さん」については両親群も子ども群も共にポジティブな得点項目が多く、両親群の方がより「親切的」「清潔な」「生き生きした」「勇敢な」「働き者の」「善い」人物というイメージ得点を示した。他方で、登場人物「隣のお爺さん」については両群間にほとんど得点差がみられず、また得点は中点に近い項目が多かった。このように、隣のお爺さんに対してポジティブでもなくネガティブでもない曖昧なイメージが得られたことは、隣のお爺さんという人物像が読者にとってははっきりしない人物であり、これは太宰治の設定とは異なっていた。もちろんその理由は定かではないが、可能性としては1つに読者の読解が十分ではないこと、もう1つに太宰治の考えに賛成しないということである。以上を明らかにするには、読解の機会を丁寧に設定し、合わせて太宰治の考えに賛成か反対かを尋ねなければならない。

以上により、本研究ではSD法により登場人物「お爺さん」「隣のお爺さん」のイメージを測定するに先立って作品を読む時間を複数回確保し、測定後に太宰

治が描く登場人物のキャラクターに賛成か反対かを2件法で尋ねる。

2. 方法

2-1 調査時期

2010年1月である。

2-2 調査協力者

筆者が担当している2009年度の心理学関係の後期授業3クラスの授業中に、受講生集団に対して調査用紙を配布して、筆記による回答を求めた。分析の対象となったのは男女合計181名でいずれも2年生～3年生である。太宰治「瘤取り」は、調査の一週間前の授業時間に配布して読む時間を取り、次の授業時間中に一斉に読んだ直後に回答を求めた。調査と研究の公表にあたっては調査協力者の個人が特定されない形で行うことを告知し協力を求めた。

2-3 手続

2人の登場人物(お爺さん、隣のお爺さん)に関して、SD法(12尺度、5件法)に回答を求めた。また、瘤取りの成功と失敗という結末についての太宰治の結論「性格の悲喜劇」に対して、賛成か反対かを択一で回答を求めた。

3. 結果

3-1 登場人物のイメージ

表3に示す語の左側から右方向へ5点から1点と得点化し、それぞれの平均値(標準偏差)を求めた。中点の3点をはさんで対比的になっている形容詞対を列挙すると次のようになった。隣のお爺さんは、「たくましい」「勇敢な」「清潔な」「働き者の」「善い」人物であった。他方、お爺さんは、「弱々しい」「臆病な」「不潔な」「悪い」人物であった。これは一般的に知られている瘤取爺の人物評とは異なっていて、むしろ2人のイメージが逆になっている。したがって、太宰治の描いた登場人物のイメージに近い回答が得られたことになる。表3には2人の登場人物に関する平均値の比較(対応のある2群間の t 検定)の結果ををまとめたものであるが、いずれの群間にも有意差が見られ

た。したがって、この結果は太宰の設定によるキャラクターに近いイメージが得られたものと考えられる。

3-2 行為の結末の帰属過程

結末の違いが「性格の悲喜劇」によるとする太宰の

設定に関して賛成か反対かという択一回答には、賛成が161名、反対が20名となり明らかに賛成の方が多かった ($\chi^2=106.75$, $df=1$, $p<0.01$)。これもまた太宰の設定に沿う方向であると考えられよう。

表3 登場人物のイメージ得点の平均値 (標準偏差)

SD 尺度 (5 件法) ↓	人物→	隣のお爺さん		お爺さん	t 検定 (両側)
陽気な	— 陰気な	2.55 (1.21)	>	2.03 (1.20)	3.86 **
おどけた	— 深刻な	2.22 (1.15)	<	2.65 (1.20)	3.99 **
外向的な	— 内向的な	2.84 (1.40)	>	2.50 (1.12)	2.41 *
親切な	— いじわるな	2.91 (1.03)	>	1.55 (0.95)	12.26 **
あたたかい	— つめたい	2.92 (1.08)	>	1.83 (0.98)	9.28 **
善い	— 悪い	3.45 (1.18)	>	1.71 (0.87)	14.30 **
清潔な	— 不潔な	3.54 (1.14)	>	2.51 (0.88)	9.65 **
働き者の	— 怠け者の	3.53 (1.13)	>	2.08 (0.91)	12.72 **
欲のない	— 欲張りな	2.50 (1.09)	>	1.35 (0.81)	11.17 **
生き生きした	— 生気のない	3.01 (1.18)	>	2.67 (0.96)	2.97 **
たくましい	— 弱々しい	3.38 (1.37)	>	2.50 (1.12)	5.79 **
勇敢な	— 臆病な	3.33 (1.46)	>	2.32 (1.27)	6.71 **

** $p<.01$ * $p<.05$ $df=180$ (両側)

全体的考察

1 ジョハリの窓による内容分析

ジョハリの窓を使って登場人物のキャラクターを分類整理した大野木 (2005) の先行研究によると、夏目漱石の『坊ちゃん』の登場人物の「おれ」は次のように描写されていた。開放領域：母からは「乱暴で行く先が案じられる」、おやじからは「貴様は駄目だ」「勘当する」、兄からは「親不孝」、清からは「真っ直でよいご気性」、町内からは「乱暴者の悪太郎」。閉鎖領域：自分が「無鉄砲、嘘をつくのが嫌い」「教師になる気も田舎へ行く気もなかった」「この地は狭苦しい鼻の先がつかえるような所」「一か月たたないうちにもう帰りたくなった」。盲点領域：職場の上司 (赤シャツ、野だいこ) からは「剣呑」「べらんめえ」「勇み肌の坊っちゃんだから愛嬌がある」「神経に異常があるに相違ない」。そして、未知領域についての記述は見当た

らなかった。本研究1でもジョハリの窓を使って、それぞれの象限 (領域) に当てはまるキャラクターの箇所を分類整理しようとしたわけであるが、作業に先立つ補助線としてキャラクターに関する記述を会話的表現、情景描写的表現、著者介入的表現の3つに分類することとした。これは「瘤取り」が『坊ちゃん』のような人物描写に関する会話が少ない上に、キャラクター設定を描写する部分が多く、登場人物Aが登場人物Bなどからどのように見られているかという人物評に関する情報が多い作品のためである。

キャラクターは著者による人物設定のほかに、作品中の登場人物間の対人関係上のやり取りによって描かれていく。研究1はジョハリの窓を用いた2つ目の試みであり、新しく会話的表現、情景描写的表現、著者介入的表現の3つを区別することが方法論として今回修正されたものとして捉えたい。

ただ、キャラクターに関する記述を3つの表現法から見ていくことは暫定的な方法論にとどまっている。

この3つが網羅的な性質を帯びるものかどうかはさらに他の作品について検討を重ねることにより明らかになっていくものと考えられる。特に、著者介入的表現（周、2003のいう「語り手は媒介者として顔を出し」）は、すでに太宰文学研究において自明のものとして論じられているようなので（森、1978；木村、2001；周、2003；佐藤、2006）、他にも同様の作品例が見られるかどうかは今後の課題となる。

2 読者への影響過程について

SD法の結果は、最初のお爺さんが良い人で隣のお爺さんが悪い人であるというような、俗に広まっている瘤取爺さんのイメージ（大野木、1985）とは異なっていた。すなわち、隣のお爺さんは「たくましい」「勇敢な」「清潔な」「働き者の」「善い」人物としてみなされ、他方、お爺さんの方は「弱々しい」「臆病な」「不潔な」「悪い」イメージを持たれていた。したがって、太宰の試みた人物像に関する表現の試みは、読者に対して、その試みに沿う方向に影響を及ぼしたと考えられよう。

なお、隣のお爺さんに関するイメージが大野木(1984a)と異なったという結果は、作品を読む機会を2回設けて読者の読解を十分にした手続きからくるものと考えたいが、調査協力者の時代的背景の差による可能性も否定できず、それがいずれであるかどうかはこの調査からは明らかではない。

要 約

太宰治の小説「瘤取り」に描かれた登場人物のキャラクターについて、作品そのものの内容分析と読者への意識調査の両面から心理学的な検討を行った。研究1ではキャラクターに関する記述を、新しく会話的表現、情景描写的表現、著者介入的表現の3つに分類した。この試みによって誰を情報源とするかが明確になりジョハリの窓への貼り付け作業が促進できたと考察した。研究2では大学生181名を対象としてSD法（5件法12尺度）を用いて登場人物のイメージを測定した。その結果、隣のお爺さんは「たくましい」「勇敢な」「清

潔な」「働き者の」「善い」人物としてみなされていて、太宰治が作品中で否定したいいわゆる悪いお爺さんと似たイメージを示した。このことから太宰治の表現した人物像に沿う方向に読後感が影響を受けたと結論づけ、先行研究との違いについて考察を加えた。

＜付記＞本研究の一部は日本心理学会第74回大会（2010年9月、大阪大学）において発表された。

文 献

- Bandura, A. (1969). *Principles of behavior modification*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Bandura, A. (1986). *Social foundations of thought and action: A social cognitive theory*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: The exercise of control*. New York: W.H. Freeman.
- 太宰治 (1972). *お伽草紙* 新潮社（初版は1945年に筑摩書房から刊行された。）
- Grimm, J. u. W. (1812-) *Kinder-und Hausmärchen*. [グリム兄弟（編）金田鬼一（訳）（1938/1979）. こびとのおつかいもの 完訳グリム童話集（五）岩波書店（文庫）Pp. 74-78.
- 堀 啓造 (1979). 詳細型物語とあらすじ型物語の登場人物のイメージの比較 *読書科学* 22、30-38.
- 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久（編）（1977）. *日本昔話事典* 弘文堂
- 稲田浩二 (1978). 兄弟譚と隣の爺譚一考 *女子大国文（京都女子大学国文学会）* 83、11-22.
- 岩崎敏夫 (1977). *柳田国男の分類による日本の昔話* 角川書店
- 岩下豊彦 (1983). *SD法によるイメージの測定—その理解と実施の手引き—* 川島書店
- 海保博之・大野木裕明・岡市広成（編）（2008）. *新訂心理学研究法* 放送大学テキスト
- 木村小夜 (2001). 『お伽草紙』論（第3章）太宰治翻案作品論 和泉書院 Pp. 201-242.
- 小林智昭（校注・訳）（1973）. *日本古典文学全集28—宇治拾遺物語—* 小学館
- 小松崎進 (1976). *とんとんむかし その1* 鳩の森書房
- 森厚子 (1978). 太宰治『お伽草紙』の表現構造—「語り」に関する方法論の試み— *椋山女学園大学研究論集* 9 (2)、29-36.
- Ohnogi, H. (1982a). Modeling attitudes in Japanese folktales and traditional arts. *Paper presented to professor*

- Bandura's Seminar on "Social learning theory" in Japan.*
[概略は祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木豊(編)
(1985). *社会的学習理論の新展開* 金子書房に紹介されている。]
- Ohnogi, H. (1982b). The reader's impressions of the Japanese folktale "KOBU-TORI". Motoaki, H., Misumi, J., and Wilpert, B. (Eds.) *Social educational and clinical psychology*. Lawrence Erlbaum. p.71.
- 大野木裕明 (1983). 日本の昔話におけるモデリング 読書科学 27, 1-9.
- 大野木裕明 (1984 a). 日本の昔話におけるモデリング II 読書科学 28, 1-7.
- 大野木裕明 (1984 b). 模倣行動研究における昔話分析の方法論 日本心理学会第48回大会発表論文集 676.
- 大野木裕明 (1985). 昔話「瘤取爺」の読後感 読書科学 29, 18-23.
- 大野木裕明 (2005). 間合い上手 NHKブックス
- 大野木裕明 (2009). 瘤取り 大野木裕明・千野美和子・赤澤淳子・後藤智子・廣澤愛子(著) 昔話ケース・カンファレンス ナカニシヤ出版 Pp. 79-86.
- 大野木裕明・伊藤秀子・中澤潤 (1987). モデリング研究の最近の動向ー日本の現状ー 心理学評論 30(2)、129-142.
- 大山正・岩脇三良・宮埜壽夫 (2005). 心理学研究法ーデータ収集・分析から論文作成までー サイエンス社
- 奥野健男 (1972). 解説 太宰治(著) お伽草紙 新潮社 Pp. 323-331.
- Osgood, C.E., Suci, G.J., and Tannenbaum, P.S. (1957). *The measurement of meaning*. Urbana :University of Illinois Press.
- 佐藤厚子 (2006). 太宰治『お伽草紙』論ー“昔話”から「新しい物語」へー 椋山女学園大学研究論集(人文科学編) 37, 21-33
- 周琪 (2003). 太宰治「瘤取り」を読む:「物語」及び物語る「私」 九大日文(九州大学日本語文学会) 2, 128 - 137.
- 柳田国男 (1983) 瘤二つ 日本の昔話 新潮社(文庫) Pp. 115-116.
- 柳原光 (1980). 心の四つの窓 サイコロジー No.1 (創刊号) 6-11. サイエンス社